

教育研究業績書

2025年05月07日

所属：薬学科

資格：教授

氏名：川添 哲嗣

研究分野	研究内容のキーワード
薬学・医療系薬学	臨床薬学，医薬品情報・安全性学，高齢者，薬物有害事象，老年薬学，老年医療，病院薬学・保険薬局管理学，在宅医療，緩和ケア，老年薬学，医療安全
学位	最終学歴
博士（医学）	高知大学大学院

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. ポリファーマシー対策を実践できる薬剤師養成のための参加型研修会の構築	2018年4月～現在	日本老年薬学会の理事及び研修教育委員会委員として「ワークショップ・BASIC1」において，ポリファーマシー対策を実践できる薬剤師養成研修会を構築した．
2. 医療用麻薬におけるレスキュー，タイトレーション，スイッチングの実践型演習問題の導入	2014年4月～現在	実践演習型問題は薬学部，訪問看護養成，高知大学医学部講義にも採用
3. 残薬に対する考え方と残薬解消方法および服薬支援方法について，スモールグループディスカッション（SGD）と解説講義の組み合わせによる授業の構築	2013年3月～現在	薬学部，看護学部，医学部において導入．薬剤師研修会，看護師研修会および高校生向け模擬授業でも多用している．
4. 薬効評価と副作用モニタリングのためのアセスメント実践手法を学ぶ研修会の組み立て	2010年4月～現在	薬剤の薬効評価と副作用モニタリングのために必要な身体，心理，環境の3要素を取り入れた研修を組み立て実践した．
5. 在宅訪問ストーリー体験型研修会プログラムを作成し導入	2000年4月～現在	主に保険薬局薬剤師に対して行う在宅訪問ストーリー体験型プログラムを構築した
2 作成した教科書、教材		
1. コンパス調剤学(南江堂)	2024年12月～現在	実践面を意識して構成された，薬学部向けの調剤学の教科書．改訂版の執筆を行った．
2. 「オピオイドカルタ」と称したカードを作成し，オピオイドの実践使用に慣れるための医療者向けツールを開発	2014年4月～現在	実臨床で働く医師，訪問看護，薬剤師の研修会において実施．大学薬学部では授業にも取り入れた．
3. 薬効評価と副作用モニタリングのための食事・排泄・睡眠・運動・認知機能による体調チェック・フローチャート（じほう）	2004年4月～現在	患者個々の体調を食事・排泄・睡眠・運動・認知機能の5領域からチェックし，その結果から薬効と副作用の評価を行う手法をフローチャート化した
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 徳島文理大学香川薬学部・薬学科・准教授	2022年4月から2025年3月	担当「臨床薬理学」「症候学」「病院・薬局実習」「がん，緩和ケア」（PBL:4年実習前，5年実習後）「認知症，ポリファーマシー」（PBL:5年実習後）
2. 高知大学医学部・臨床教授	2014年4月から2022年3月	臨床薬理学講座 医療用麻薬
3. 高知県立大学看護学部・非常勤講師	2013年4月から2022年3月	在宅医療へのかかわりと多職種連携 ポリファーマシー対応
4. 慶応義塾大学薬学部・非常勤講師	2010年4月から2019年3月	老年薬学講座 薬剤師による在宅医療へのかかわりと多職種連携
4 その他		
1. 博士（医学）	2025年3月24日	高知大学 甲総医博第173号
2. 修士（医科学）	2021年3月23日	高知大学 総医修第108号
3. 学士（薬学）	1990年3月22日	神戸学院大学 薬第2710号

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 薬剤師免許	1990年6月26日～現在	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 医学部附属病院において医療安全管理委員会委員	2019年12月から2022年3月	医療安全管理委員会委員を担当 ブレアボイド件数の集計と事例報告
2. 医学部附属病院において乳腺外科，呼吸器外科及び泌尿器科の外科病棟を担当	2019年6月から2022年3月	服薬指導，抗がん薬の調整，病棟薬剤の管理，医師，看護師との連携，カンファレンス参加，入退院支援

職務上の実績に関する事項				
事項		年月日		概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項				
3. 病院の薬剤部長としてマネジメント業務および精神科病棟管理を担当		2014年4月から2019年5月		薬剤部長として、組織マネジメントを実施。 精神科病棟では服薬指導の他、入退院支援およびポリファーマシー解消への取り組みを行った。 数社において役員を兼務し、高知県、東京都、埼玉県において保険薬局の運営を行うと共に、薬局の店頭に立ち調剤、服薬指導、在宅訪問を行った。 病棟における服薬指導、病棟薬剤の管理、医師、看護師との連携
4. 保険薬局薬剤師として保険薬局の経営、運営および在宅医療に携わった		1998年3月から2014年3月		
5. 病院において外来および病棟業務を担当		1994年3月から1998年2月		
4 その他				
1. 高知県薬事功労者 知事表彰受賞		2018年10月		
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. さまざまな視点で考える在宅医療と患者の目標達成	共	2023年6月	調剤と情報(じほう)，2023年6月号	在宅医療に携わる薬剤師が持つべき視点について言及している。特に「目標設定」の重要性を強調している。A4判，146頁 ＊本人担当部分：巻頭言，第1章：患者の目標達成のためにできる薬剤師のアプローチ，第2章：患者の目標達成のための多職種協働(P7-16)
2. 疾病管理・運営・法的問題まですべてわかる在宅医療マネジメントQ&A	共	2018年5月	日本医事新報社	在宅医療およびそれを取り巻く様々な多職種協働の実像をQ&A方式で解説した書である。対象は在宅医療に関わる医療・介護・福祉の全職種である。B5判，482頁 ＊本人担当部分：第3章Q108：訪問薬剤管理指導，服薬指導の方法(p160-162)
3. 在宅薬剤管理入門～コミュニティ・ファーマシストの真髄を求めて	共	2014年9月	南江堂	在宅医療における訪問薬剤管理指導のノウハウおよび心構えを系統的にまとめた書である。A5判，241頁 ＊本人担当部分：第Ⅱ章3(p35-38)，第Ⅳ章7-9(p97-103)，第Ⅴ章3，7(p114-116，133-139)，第Ⅶ章2，4-6(p201-204，211-218)
4. 在宅医療Q&A	共	2011年8月から現在第7版	じほう（2年ごとに改定発刊：平成23年版、平成25年版、平成27年版、平成29年版、令和元年版、令和3年版、令和5年版）	在宅医療における基本的Q&Aとともに、令和3年版からは在宅医療におけるCovid-19への対応Q&Aが加筆された内容となっている。A5判，305頁(令和3年版) 本人担当部分：第2章訪問準備：Q1-7(p22-30)，第3章在宅訪問：Q8-14(p32-41)，Q17-20(p42-45)，Q23-25(p52-58)，第4章訪問後の報告・請求：Q35-36(p76-79)，第5章患者支援，服薬支援のポイント：Q58(p115-116)，第6章多職種連携のポイント：Q70(p137-141)，Q78(p156-157)，Q92-98(p184-192)，第8章認知症の知識：Q129(p265-267)。
5. 老年薬学プラクティス	共	2011年3月	南江堂	超高齢社会を迎える中で、老年薬学分野ですぐに役立つ内容についてQ&A方式で解説している。 B5判，全202頁 本人担当部分：4章C. 暮らしと薬(p86-106)
6. 川添式 熱血患者指導術 「Do処方，特変ナシ」から脱却せよ！	単	2010年6月	日経BP社	薬の説明や服薬支援方法は患者の暮らしを踏まえて行うことが大切であり、画一的な服薬指導や配達・配薬だけの在宅医療ではいけない。薬剤師の行う服薬指導および在宅医療へのかかわり方について、筆者がどう考え、どのように実践しているのかについて様々な角度から解説している。 4－6判，全242頁
7. 生活機能と薬からみる体調チェック・フローチャート解説と活用	共	2001年8月：2011年8月二版	初版：日本薬剤師会 第二版：じほう	食事・排泄・睡眠・運動機能・認知機能に関する質問から薬剤アセスメントを行う思考過程をチャート図化して解説している。 A4判，全94頁 本人担当部分：総論(p3-4)，食事編(p7-16)，排泄編(p31-40)，睡眠編(p47-57)，運動編(p63-73)，認知機能編(p75-86)，あとがき(p91-92)を単著。
2 学位論文				
3 学術論文				
1. Quantification of Oversupply of	共	2024年6月	Biol Pharm Bull. 2024;47(6)：	日本における慢性疾患薬剤の患者一人当たりの過剰供給の程度，過剰供給患者の割合，過剰供給薬剤の過剰日数とコストを定量化し

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Chronic Disease Medications among Patients Aged $\geq$ 55 Years in Japan.	共	2023年8月	1128-1135.	た。日本の大規模保険請求データベースを用いた後ろ向き全国コホート研究。 著者：Tomida J, Wasa C, Hirata M, Ichihara M, Kawazoe T, Iihara N.
2. Pharmacist Interventions for Adverse Drug Reactions in Palliative Care: A Multicentre Pilot Study			Pharmazie. 2023 Aug 1;78(8) :141-149.	
3. Exosome-like nanoparticles derived from Allium tuberosum prevent neuroinflammation in microglia-like cells	共	2023年6月	J Pharm Pharmacol. 2023 Oct 5;75(10): 1322-1331.	Allium tuberosumから抽出した植物由来の細胞外膜小胞であるエクソソーム様ナノ粒子ELN(A-ELN)の抗神経炎症活性を調べた。 結論:A-ELNはミクログリアの炎症を緩和することができる。その効果は、デキサメタゾンなどの抗炎症薬を取り込むことで増強され、神経炎症に対する治療薬や薬物送達担体となる可能性がある。 著者：Tomoaki Ishida, Kei Kawada, Kohei Jobu, Shumpei Morisawa, Tetsushi Kawazoe, Satomi Nishimura, Keita Akagaki, Saburo Yoshioka, Mitsuhiko Miyamura
4. Analysis of Urinary Retention Caused by Selective β 3- adrenoceptor Agonists Using the Japanese Adverse Drug Event Report Database (JADER)	共	2023年5月	Pharmazie. 2023 May 1;78(5) :56-62.	選択的 β 3-アドレナリン受容体作動薬(β 3-アゴニスト)服用患者における副作用の発現状況とその特徴を分析した。 β 3-アゴニストはOABに対して有用であるが、尿閉を誘発する可能性があり、これらはさらに重篤な状態に発展する可能性がある。 著者：Tetsushi Kawazoe, Tomoaki Ishida, Kohei Jobu, Kei Kawada, Saburo Yoshioka, Mitsuhiko Miyamura
5. Yokukansan suppresses neuroinflammation in the hippocampus of mice and decreases the duration of lipopolysaccharide - and diazepam-mediated loss of righting reflex induced by pentobarbital	共	2022年6月	Journal of Natural Medicines 76, pages634-644 (2022)	抑肝散の有効成分であるグリチルリチン酸は、ペントバルビタール誘発性右折反射消失の持続時間を部分的に減少させた。LPS刺激BV2細胞における誘導性一酸化窒素、インターロイキン-6、腫瘍壊死因子のmRNA発現を抑制した。結論：抑肝散とグリチルリチン酸は神経炎症誘発性低活動性せん妄の治療薬として有効であることが示唆された。 著者：Kei Kawada, Tomoaki Ishida, Kohei Jobu, Shumpei Morisawa, Tetsushi Kawazoe, Motoki Nishida, Satomi Nishimura, Naohisa Tamura, Saburo Yoshioka, Mitsuhiko Miyamura
6. Association of Aggression and Antiepileptic Drugs: Analysis Using the Japanese Adverse Drug Event Report (JADER) Database		2022年6月	Biol Pharm Bull. 2022; 45(6) : 720-723.	攻撃性は抗てんかん薬(AED)による攻撃性とAED使用との関連を検討することを目的とした。ペランパネル、レベチラセタム、ラコサミド、ラモトリギン、バルプロエート、カルバマゼピンであった。ペランパネルとレベチラセタムの併用療法では、有意な攻撃性シグナルが認められた。さらに、レベチラセタムで治療された60歳未満の患者では、攻撃性が頻繁に発生することがわかった。 著者：Kei Kawada, Tomoaki Ishida, Kohei Jobu, Tsuyoshi Ohta, Hitoshi Fukuda, Shumpei Morisawa, Tetsushi Kawazoe, Naohisa Tamura, Mitsuhiko Miyamura
7. Analysis of Drug-Induced Liver Injury from Bofutsushosan Administration Using Japanese Adverse Drug Event Report (JADER)	共	2022年4月	Biol Pharm Bull. 2022; 45(4) : 460-466	防風通聖散は近年、生活習慣病の治療に有効であることが報告され、使用される機会が増えているが、その副作用は多く、中でも薬剤性肝障害が最も多く報告されている。防風通聖散は生活習慣病に有用な薬剤であるが、過度の使用は控える必要があり、また、重篤な有害事象を避けるために臨時の使用には注意が必要である。 著者：Tomoaki Ishida, Kei Kawada, Kohei Jobu, Tetsushi Kawazoe, Naohisa Tamura, Mitsuhiko Miyamura

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
Database 8. Impact of Gut Microbiota on the Pharmacokinetics of Glycyrrhizic Acid in Yokukansan, a Kampo Medicine	共	2022年1月	Biol Pharm Bull., 2022; 45(1) : 104-113	腸内細菌叢は抑肝散の成分であるグリチルリチン酸(GL)の薬物動態に影響を与える可能性がある。GLは腸内細菌によってグリチルリチン酸(GA)に代謝され、消化管で吸収される。アモキシシリンとバンコマイシンを投与したマウスでは、GAの血漿濃度が低く、BacteroidesとFirmicutesのレベルが低かった。 著者：Tomoaki Ishida, Kohei Jobu, Kei Kawada, Shumpei Morisawa, Tetsushi Kawazoe, Hisashi Shiraishi, Hiroko Fujita, Satomi Nishimura, Hitomi Kanno, Mitsue Nishiyama, Kazuo Ogawa, Yasuyo Morita, Kazuhiro Hanazaki, and Mitsuhiko Miyamura
9. Added value of anxiolytic benzodiazepines in predictive models on severe delirium in patients with acute decompensated heart failure: A retrospective analysis	共	2021年4月	PLOS ONE, 2021 Apr 22;16(4) : e0250372.	急性心不全(ADHF)患者におけるせん妄は、臨床転帰の悪化と関連している。いくつかの薬剤がせん妄の危険因子として報告されているが、ADHF患者への影響はまだ不明である。本研究では、特定の薬剤の使用とせん妄の関連、および従来の危険因子に基づくモデルにおけるその相加的予測値を明らかにすることを目的とした。 著者：Kei Kawada, Hitoshi Fukuda, Toru Kubo, Tsuyoshi Ohta, Tomoaki Ishida, Shumpei Morisawa, Tetsushi Kawazoe, Manami Okamoto, Hiroko Fujita, Kohei Jobu, Yasuyo Morita, Tetsuya Ueba, Hiroaki Kitaoka, Mitsuhiko Miyamura
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 第66回老年医学会学術集会シンポジウム演者	共	2024年6月	ウインクあいち	演題：新時代の臨床薬学教育における視点と思考の変更ポイント
2. 第92回 医療薬学公開シンポジウム演者	共	2023年12月	高松サンプォート	演題：新時代の臨床薬学教育における視点と思考の変更ポイント
3. 第56回 日本薬剤師会学術大会・スポンサーシンポジウム演者	単	2023年9月	和歌山, 和歌山県立医科大学	演題：臨床薬学教育と薬剤師の明るい未来
4. 第16回 日本在宅薬学会・学術大会・シンポジウム演者	共	2023年7月	神戸国際会議場	演題：人生会議と薬剤師～想いを叶え、暮らしを支えるための関わり方
5. 第55回 日本薬剤師会学術大会・分科会演者	共	2022年10月	仙台国際センター	演題：ACP(人生会議)とケアプランを踏まえた訪問計画書とは～地域包括ケアシステムを機能させるために～
2. 学会発表				
1. 第63回日本薬学会・日本薬剤師会・日本病院薬剤師会中国四国支部学術大会	単	2024年11月	就実大学	演題：急性心不全患者におけるせん妄の誘発因子と抑制因子の探索：系統的レビューとメタ解析
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
6. 研究費の取得状況				
1. 2022年度科研費奨励研究		2022年		22H04285：経口抗菌薬による腸内細菌叢の変化に伴うグリチルリチン酸の吸収に与える影響の解明

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1. 2025年4月～現在	尼崎市立 大成中学校 学校薬剤師
2. 2022年4月から2025年3月	香川・タバコの害から健康を守る会 理事
3. 2019年4月から2025年3月	学校法人高知学芸高等学校 学校薬剤師
4. 2018年4月から2020年3月	南国市地域ケア推進会議委員
5. 2016年1月～現在	日本老年薬学会 理事
6. 2014年4月から2025年3月	高知県立岡豊高等学校 学校薬剤師
7. 2013年4月から2019年3月	高知県災害薬事コーディネーター
8. 2010年11月～現在	一社) 全国薬剤師・在宅療養支援連絡会副会長
9. 2010年6月～現在	日本緩和医療薬学会 評議員
10. 2002年6月から2018年5月	高知県薬剤師会：常務理事
11. 2002年6月から2014年5月	日本薬剤師会：職能対策委員会：高齢者・介護保険等検討会委員